

多摩市は、1971(昭和46)年11月に市制を施行し、今年で50周年という大きな節目を迎えました。

多摩町の時代は、人口3万人あまりの静かな田園地帯でしたが、深刻な住宅難に加えて、戦前から鉄道で結ばれていたという好条件も重なり、現在の聖蹟桜ヶ丘駅周辺地域を中心に、都心への通勤者の居住地として注目されるようになり、高度経済成長期を支える郊外都市のトップランナーとして、日本でも最大規模の多摩ニュータウン開発に伴う急激な人口増加を受けて市制施行し、多摩市となりました。

現在へ至る過程の中で、このまちで暮らしてきた方々と、全国から集まってきた方々が、様々な価値観を共有しながら「新しいまちづくり」を進めてきました。

本書に記録された市民の皆さんのあゆみが、次の50年のまちづくりの手がかりとなれば幸いです。

次の50年に向けて、少子高齢化、地球温暖化、コロナ禍など、社会の大きな変化に取り組んでいかなければなりません。

変わらないのは市民が主役のまちづくりです。

これからも市民の誰もが健康で幸せを実感できる、健幸都市を目指し、次世代につながる持続可能なまちをつくっていく一歩をさらに踏み出していきましょう。

市民誰もがこのまちを愛し、誇りがもてるシビックプライドあふれるまちづくりを今後も進めていきます。



多摩市長 阿部 裕行



# はじめに

1889(明治22)年に誕生した多摩村が、多摩町になったのは1964(昭和39)年のことでした。その後、多摩ニュータウンの中核地区となったことで町の人口は急増し、町制施行からわずか7年後の1971(昭和46)年に市制を施行し、多摩市が誕生しました。

本書は、その市制施行50周年を記念して編集したものです。多摩市では、1995(平成7)年から99年にかけて多摩市史7巻全8冊を刊行しています。市史の刊行から20年余りが経過しているため、その補遺の意味合いも込めて、本書は、多摩ニュータウン開発以後に力点を置いて編さんを進めました。

多摩市では、2017(平成29)年3月に「多摩市市制施行50周年記念誌作成準備委員会」を立ち上げ、3名の学識経験者と2名の公募市民とともに編集の基本方針を定めました。記念誌はビジュアルな形での刊行を目指して、写真や図版を歴史資料として取り扱い、「図録」として編集することとなりました。同年10月に「作成準備委員会」は、メンバーも入れ替わり、学識経験者2名、市内研究団体代表2名、公募市民2名により「編集委員会」として新たなスタートを切りました。その後4年あまりにわたって10数回の会議を重ね、50名を超える執筆者の協力のもと、ようやくここに本書を刊行することができました。

刊行にあたり、資料を提供して下さった市民の皆様、そして執筆者の皆様、関係者の皆様、委員会の皆様に、この場を借りて深くお礼を申し上げます。本書が、多摩市の次の50年をつなぐものとして、市民の皆様に読み継がれることを期待します。

2021(令和3)年11月

多摩市市制施行50周年記念誌編集委員会委員長 浜田 弘明

# 多摩市市制施行50周年記念誌

序文	1
はじめに	2
目次	3
凡例	4

## 第1章 写真で見る多摩 いま・むかし

関連マップ	6
航空写真	8
航空斜写真	10
土地利用図	12
定点撮影写真でみる今昔	14

## 第2章 多摩市の環境

(1)多摩の地形	18
(2)かつての里山と生き物	20
(3)まちの中で生きる生き物	24

## 第3章 多摩市の歴史(多摩ニュータウン開発前まで)

(1)旧石器時代から古代までの多摩	31
①多摩丘陵の開発のはじまりと武蔵国府の周縁地として	32
(2)鎌倉時代から江戸時代までの多摩	39
①鎌倉街道の要衝として	40
②江戸の近郊農村として	46
(3)多摩村から多摩町へ ～明治時代から多摩ニュータウン開発前の多摩～	51
①多摩村時代	52
②多摩町町制施行	60
③人々の暮らし	68

## 第4章 多摩市の歴史(多摩ニュータウン開発から)

(1)市制施行前 ～多摩町時代と多摩ニュータウン開発～	79
①多摩ニュータウン開発	80
②初期入居の人々とくらしの変化	92
(2)市制施行以降 ～街づくりの進展と変化～	109
①多摩市市制施行	110
②多摩ニュータウン建設の進展と街の変化	112
③変わる地域と文化	132

## 第5章 多摩市の現在から未来へ

①再び変貌する地域	146
②産業と観光	158
③文化・芸術・スポーツ	164
④見どころいっぱい・多摩市	168
⑤これからの取り組み ～未来の多摩市へ～	178

## 資料編

I. 統計	198
II. 年表	202
III. 掲載写真、図版一覧	209
主要参考文献	217
執筆者・関係者・協力者一覧	219
あとがき	220

(表紙写真)

町制施行を祝う聖蹟桜ヶ丘駅	1964(昭和39)年/多摩市所蔵
ホンドタヌキ	2018(平成30)年10月/佐藤公泰氏撮影
多摩センターイルミネーション	2018(平成30)年11月/新都市センター開発株式会社提供
多摩市市制施行記念式典のようす	1971(昭和46)年11月/多摩市所蔵
宝野公園より富士山	2008(平成20)年/樋口徹氏撮影
調布玉川惣畫圖	1845(弘化2)年/多摩市指定有形文化財・多摩市教育委員会所蔵
唐木田駅	1989(平成元)年2月/公益財団法人多摩市文化振興財団撮影
木造隨身倚像(古像)	1319(元応元)年造立/東京都指定有形文化財・武蔵一之宮小野神社所蔵/『武蔵国一之宮』より
北より聖蹟桜ヶ丘駅周辺・桜ヶ丘団地	2012(平成24)年7月/公益財団法人多摩市文化振興財団撮影

## 凡 例

1. 本書は、『多摩市市制施行50周年記念誌』である。作成にあたっては、多摩市企画政策部企画課が主宰した「市制施行50周年記念誌準備委員会」にて編集基本方針を決定した。編集基本方針に従って「市制施行50周年記念誌編集委員会」(委員長: 浜田弘明)を開催し、各執筆者に依頼して原稿を集めた。事務局は公益財団法人多摩市文化振興財団が担った。
2. 編集基本方針は、以下のとおりである。
  - (1) 現在散在している多摩ニュータウン関連の貴重な資料を、市民の財産とし後世に伝えるとともに、今後の多摩市のまちづくりを考えていくための布石とするため、市制施行以降の多摩ニュータウンの変遷を中心とした、近現代史にスポットをあてた記念誌とする。
  - (2) 『多摩市史』の成果を十分に継承し、それまでの歩みを体系的に記録するとともに、それ以降の新しい知見を加えた未来に向けた記念誌とし、次回市史を作成する際に利用できる質の高い内容とする。
  - (3) 市史を刊行した1997(平成9)年以降について、多摩地域のニュータウン変遷に関わる有形・無形の資料を収集し、それ以前については、現在ある資料を基に編集する。現在保有している資料および編集の過程で収集した資料は、将来の市民の利用に供することを意図して、整理・保存・管理する。
  - (4) 客観的で平易な記述とし、市民に分かりやすく広く親しまれ、今後のまちづくりや子どもたちの教育にも活用される記念誌とする。

編集にあたっては、以上の編集基本方針を踏まえたうえ、①最新の情報を取り入れ、理解しやすい内容にすること、②中学校等での教育でも活用できる内容とすることに留意して編集を進めた。
3. 本文中の表・図・写真の所蔵者名は、巻末一覧に掲載した。
4. 本書の編集は、多摩市企画政策部企画課が主宰した編集委員会による議論をもとに編集を進めた。  
【編集委員会】委員長 浜田弘明、副委員長 保坂一房、編集委員 川村恵彦・長倉勉・松井江里子・三輪勝子(以上五十音順)  
【事務局】多摩市企画政策部企画課・多摩市教育委員会教育振興課  
【事務局(制作委託)】公益財団法人多摩市文化振興財団  
【デザイン】田口桃代(MOGRAF)
5. 本書の編集・執筆にあたっては、各機関・団体および個人の方々のご協力を得た。紙面を借りて感謝の意を表す。

## 第1章

# 写真で見る多摩 いま・むかし

多摩市は多摩ニュータウンをはじめとする様々な開発を経て、大きくその景観を変えました。山林だった丘陵部分は宅地開発され、住宅地となりました。また、小川が通っていた谷の部分には道路が整備され、土地の高低差や河川の流路なども変貌しました。その風景は現在も刻々と変わり続けています。

ここでは、写真から多摩の昔と現在の様子を振り返ります。



鶴牧・落合・豊ヶ丘・貝取付近 2012(平成24)年

# 関連マップ

本図は、本編に登場する場所を地図に入れたものです。本書を見て興味を持たれた場所があったら、実際に行ってみましょう！

※なお、場所によっては事前連絡が必要な場所などもありますので、確認してからお出かけください。

## 《凡例》

- …… 第1章に登場する場所
- …… 第2章に登場する場所
- …… 第3章に登場する場所
- …… 第4章に登場する場所
- …… 第5章に登場する場所
- …… その他（文化財、天然記念物など）

※遺跡や団地、大学、公園の点は、その範囲の一部だけを示している場合があります。



多摩市デジタルアーカイブ



## 航空写真



### 唐木田・落合付近

上:1972(昭和47)年12月

下:2005(平成17)年10月

市制施行間もない1972(昭和47)年には、愛宕地区で団地の入居が始まっており、造成工事が落合・鶴牧地区でおこなわれている。唐木田は、まだ造成工事が始まっていなかった。現在は多摩センター駅を中心に、多摩ニュータウンのセンター地区として発展している。

### 永山・諏訪付近

上:1972(昭和47)年12月

下:2017(平成29)年8月

1972(昭和47)年では、永山・諏訪地区の団地が入居から1年を過ぎているものの、樹木はまだ育っていない。瓜生や貝取では昔ながらの集落が写っている。1974(昭和49)年に永山駅が開業し、現在は駅周辺には商業施設が集まっている。諏訪地区では、多摩ニュータウンで初めての団地建て替えがおこなわれた。



多摩市デジタルアーカイブ



多摩市デジタルアーカイブ



多摩市デジタルアーカイブ



多摩市デジタルアーカイブ

**和田・東寺方付近**

上:1972(昭和47)年12月  
下:2005(平成17)年10月

1972(昭和47)年にすでに桜ヶ丘やノ宮の住宅団地などがあり、多摩ニュータウン開発前から開発が進んでいたことが分かる。大栗川の河川改修工事が進んでいるが、これは多摩ニュータウン開発に関連した工事だった。現在は宅地開発が進んでおり、特に川崎街道沿いのマンション群が目を引く。

**関戸・連光寺付近**

上:1972(昭和47)年12月  
下:2008(平成20)年9月

1972(昭和47)年頃は、聖蹟桜ヶ丘駅付近もまだそれほど市街地化しておらず、駅から少し離れた場所には水田があった。乞田川は改修され、ニュータウン通りは整備されている。現在は駅周辺の市街地化が進み、川崎街道も拡幅されている。右下のまとまった緑地は、都立桜ヶ丘公園で市民の憩いの場になっている。

## 航空斜写真

航空斜写真で多摩市の今昔を比較してみましょう。  
街が大きく変化していることが分かります。

1976



稲城市上空から諏訪・永山方面を見る 1976(昭和51)年3月



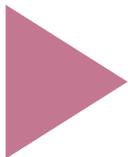
1968

桜ヶ丘団地上空から諏訪・永山方面を見る 1968(昭和43)年12月

2004



稲城市上空から諏訪・永山方面を見る 2004(平成16)年10月



2012

桜ヶ丘団地上空から諏訪・永山方面を見る 2012(平成24)年7月

## 土地利用図

地形図には、標高を表す等高線の他に、様々な地図記号が記されています。これらのうち、田・畑・桑畑・山林（針葉樹林・広葉樹林・竹林など）・集落や市街地などを示す記号は、土地利用記号と呼ばれます。これらを着色すると、地形図が作られた時代の地域の土地利用を知ることができます。

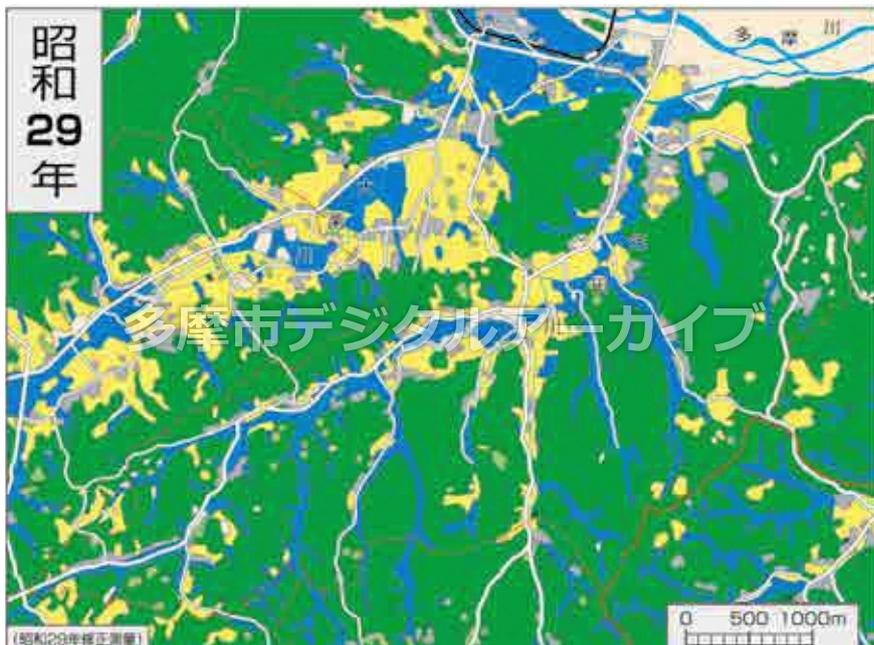
多摩が村だった時代の1921（大正10）年の土地利用図を見ると、丘陵部の大半は山林（緑）で、多摩川の低地と、その支流である大栗川と乞田川の谷戸には、田（青）が広がっていたことがわかります。また当時は、養蚕が盛んであったことから、大栗川沿いには、桑畑（薄緑）が広がっています。



《凡例》

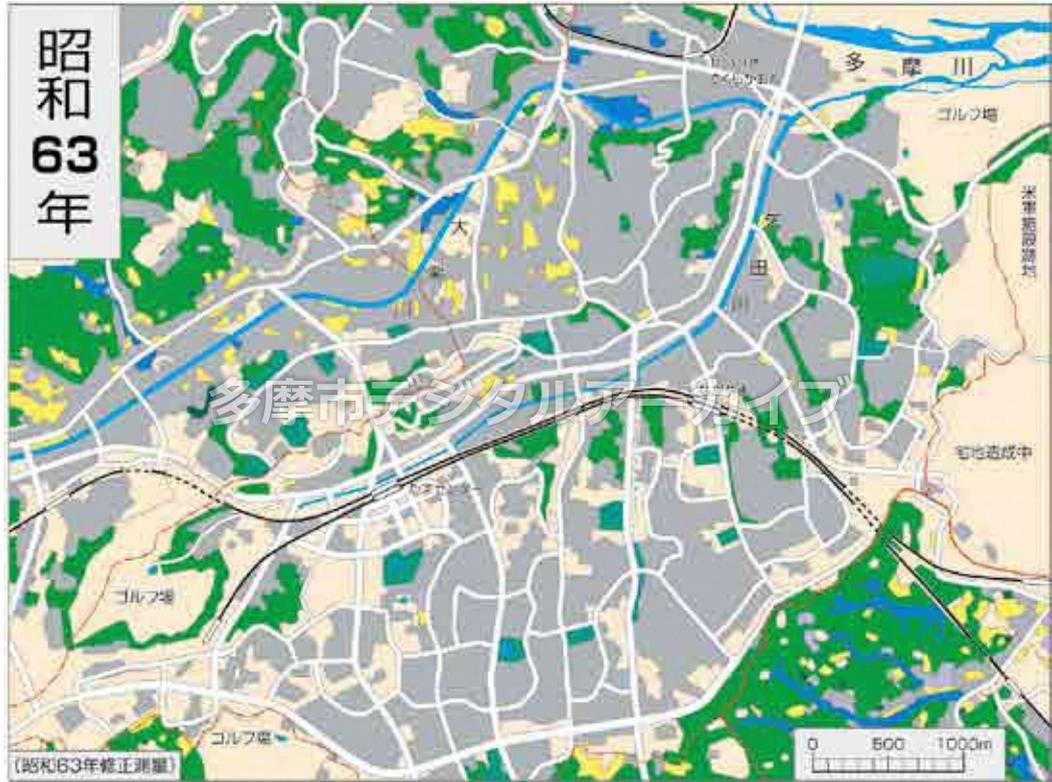
- 田
- 畑
- 桑畑
- 竹林
- 果樹園
- 公園
- 森林
- 集落・宅地建物
- その他

**1921(大正10)年土地利用図**  
1920(大正9)年の多摩村の人口は4,111人であった。



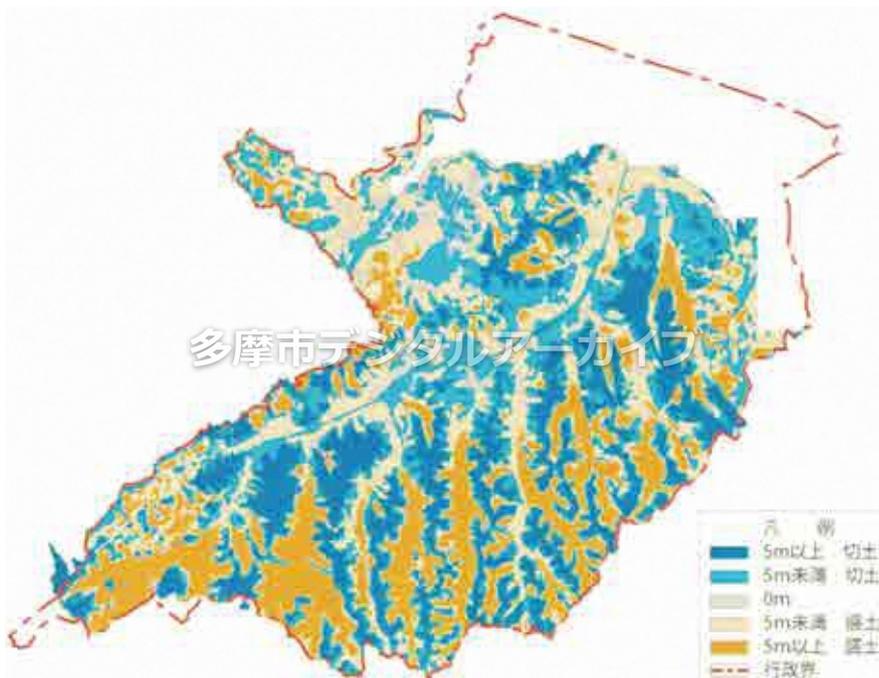
**1954(昭和29)年土地利用図**  
1955(昭和30)年の多摩村の人口は7,600人で、その後1965(昭和40)年に人口1.8万人で町制を施行した。

戦後1954(昭和29)年の図を見ると、桑畑の多くは畑(黄)に変わりますが、大きな変化は見られません。その後、1960年代から多摩ニュータウンの造成が始まると、土地利用は急激に変わります。山林が切り開かれ、宅地造成された結果、1988(昭和63)年の図では、大半が市街地(灰)と化し、周辺にはゴルフ場や宅地造成中の場所も見られます。(浜田弘明)



**1988(昭和63)年土地利用図**

1971(昭和46)年に人口4.2万人で市制を施行し、1988(昭和63)年には人口が136,249人に達している。



**大規模宅地造成地地盤改変図**

1958、61年と1997～99年の地形図を比較して作成されたもので、盛土と切土の高さが分かる。

## 定点撮影写真でみる今昔



**聖蹟桜ヶ丘駅前** 左:1964(昭和39)年頃 右:2021(令和3)年5月

聖蹟桜ヶ丘駅の駅舎を現在のUロード付近から撮影した写真。旧駅舎は現在よりも北側の位置にあった。多摩ニュータウン初期入居時には、京王相模原線・小田急多摩線の延伸が間に合っておらず、聖蹟桜ヶ丘駅が唯一の最寄り駅であった。



**多摩センター駅前南側** 1965~74年(昭和40年代)

造成工事前に山上から撮影されたもの。遠景に写る鉄塔が目印になり、場所が分かる。



1978(昭和53)年3月

京王・小田急線の多摩センター駅および駅前の開発が進む。



2016(平成28)年6月

多摩都市モノレールの多摩センター駅が、「コミュニティ館」の西寄りに2000(平成12)年1月、開業した。遠景には松が谷地区が望める。現在は近い高さから広く撮影できるポイントがないため、丘の上プラザ屋上から撮影した。



**馬引沢の三差路の今昔** 左:1967(昭和42)年 右:2016(平成28)年

当時馬引沢には多くの三差路があった。写真の中央やや右寄りの白い建物の屋根後方に丸い自然石の「馬頭観音」、同じ建物の左側の三差路に辻の地蔵と呼ばれた「お地蔵様」が建っていた。2つの三差路は、現在、小田急多摩線と京王相模原線の線路下数メートルの位置にあり、全くその当時の面影はない。しかし、小田急・京王の上下線計4本と片側2車線の馬引沢を貫く都道の存在が、現在も交通の要衝であることを表している。



**旧鎌倉街道、熊野神社治いの風景** 上:1955~64年(昭和30年代)頃 下:2021(令和3)年5月

旧写真の中央やや左に見える建物は郵便局で、元は1928(昭和3)年に多摩郵便取扱所として開設され、1930(昭和5)年に独立した集配局(多摩局)となった。1967(昭和42)年に東寺方へ多摩郵便局(現聖蹟桜ヶ丘郵便局)が移転し、この場所には新たに多摩関戸郵便局が置かれた。多摩郵便局は1982(昭和57)年に鶴牧に移転した。



**帝京大学南より和田・愛宕方面**

上:1968(昭和43)年6月

下:2012(平成24)年10月

旧写真の手前側に野猿街道が通り、中央の低い植物群の下を大栗川が流れる。左奥に、落川・和田の集落と和田団地の造成地が写る。新写真では、遠景左側に愛宕配水所、遠方中央に愛宕緑地、遠景右側の高い建物は「コーシャハイム」。和田地区は近年大型建物の建設が進んでいる。



**連光寺配水塔上より聖ヶ丘方面**

上:1970(昭和45)年12月

下:2012(平成24)年5月

旧写真左隅には、のちに「尾根幹線」になるカーブが写り、入居開始を約4ヶ月後に控えた諏訪・永山の団地が建ち並ぶ。右隅に見えている住宅は東部団地。遠景にはわずかに日野の百草団地も見える。新写真左手には多摩東公園交差点が整備され、多摩市立陸上競技場も見えている。



**豊ヶ丘北公園より多摩第三小学校・愛宕方面**

左:1969(昭和44)年頃 右:2012(平成24)年5月

旧写真の左に多摩市立多摩第三小学校が見える。新写真は左側木立の中に多摩第三小学校がある。

**川崎街道一ノ宮の交差点**

左:1965~74年(昭和40年代)頃

右:2012(平成24)年1月

写真中央に写る木はほとんど変わっていない。川崎街道が拡幅された他、近隣では踏切の立体交差化も進められた。